

私立高等学校 2018年度入試予測

首都圏の私立高校入試は都県ごとに制度や受験生の動向に違いがあります。それぞれのエリアの「入試地図」を押さえ、「行きたい私立」を勝ち取るように的確な受験プランを立てて、本番に備えましょう。2017年度 の状況を都県別に分析し、2018年度入試の最新情報もご紹介していきます。

東京都

難関・上位校の「動向」は？ 「併願優遇」で押さえを確保

東京都内の私立高校で2017年度に高校募集を行ったのは183校でした。受験のメインである一般入試の総応募者は約8万1600人で、ほぼ前年並みとなっています。

都の生活文化局によると、一般入試の「実質競争倍率」（総応募者数÷総合格者数）は1.37倍でした（前年は1.38倍）。ただ、これは応募者数で算出していますから、受験者数による実質倍率（平均）は1.2～1.3倍程度とみられます。

最近の一般入試では、上位校などを除き、「併願優遇」（後述）の運用で「競争」が抑えられ、不合格があまり出ない高校も多くなっています。

都内私立の一般入試は2月10日に開始され、13日ごろに大半の学校で試験を終了します。おもな難関・上位校の受験動向をみてみましょう。

2017年度に注目されたのは、**慶應義塾**（神奈川・男子校）の1次試験が前年までの2月12日から同10日に変わったことです。このため、同校へ受験生（男子）が流れて、10日校のなかで**早稲田大系属早稲田実業学校**（男子校346人減）や、**開成**（113人減）、**中央大附**（男子97人減）、**桐朋**（68人減）などで受験者が減少しました。**早稲田大系属早稲田実業学校**の男子校、**開成**はともに倍率が3.3倍

→2.9倍とやや下がり、**中央大附**の男子、**桐朋**では合格者の増員もあって倍率はそれぞれ3.0倍→1.9倍、1.9倍→1.2倍に緩和しています。

一方、12日校では**明治大付明治**（193人増）、**明治大付中野**（110人増）で受験者が急増。**慶應義塾**との競合が解消され、さらに**青山学院**が例年の12日から一時的に11日に移動したことが影響しました。ただ合格者が多めに出されたため、**明治大付中野**は倍率3.1倍→3.3倍とそれほど上がらず、**明治大付明治**は前年と同じ倍率2.5倍に。

青山学院と試験日が重なった11日校の**豊島岡女子学園**では受験者が急減（119人減）し、倍率2.2倍→1.9倍とやや低下。**青山学院**自体は受験者増（44人増）と合格者の絞り込みで倍率3.1倍→4.7倍にアップしました。2018年度には**青山学院**が元の12日に戻り、同校に絡んだ「変動」はある程度、落ちつくとみられます。

ほかの大学付属校はどうか。**早稲田大高等学院**では近年、倍率2倍台で推移し、2017年度は2.3倍。**慶應義塾女子**は受験者減（57人減）でしたが、合格者の絞り込みで倍率は前年と同じ3.2倍に。**早稲田大系属早稲田実業学校**の女子校は合格者の増員で倍率3.2倍→3.0倍とやや低下。

進学校では公立（都立）志向の「逆風」を受けており、**成城**は1.9倍、**城北**は1.4倍、**巣鴨**は1.2倍と倍率2倍未満に。**本郷**では2.4倍と倍率2倍台を維持しました。

上位から中堅レベルの学校で、一般の受験者増



が目立ったのは、**國學院**（905人増）、**大成**（449人増）、**明治学院**（271人増）、**関東国際**（166人増）、**淑徳巣鴨**（160人増）、**杉並学院**（150人増）など。このなかで、**國學院**は試験を2回から3回実施に増やし、人気アップにつながりました。

さて、多くの中堅校などは一般入試に「併願優遇」の枠を設けており、2017年度は約140校に広がっています。これは、その高校を「併願」（第2志望以下）で受験するときの制度です。各校が定めた内申点の基準などを満たせば、入試前の段階でほぼ合格とされる、あるいは試験に一定の加点をする「優遇」が行われます。大勢の都立（公立）志望者などが押さえ校（すべり止め）を確保するために、この併願優遇を利用しています。

では、推薦入試について述べましょう。都内私立で2017年度に推薦を行ったのは、全体の9割以上の168校。その総応募者は約1万6700人で、「実質競争倍率」（平均）は前年と同じ1.12倍でした。推薦の試験は1月22日以降です。

都内私立では、単願推薦（第1志望）に加え、併願推薦（通称「B推薦」）も行う高校がかなりあります（2017年度は約80校）。ただし、東京の受験生には単願推薦のみで、併願推薦は同様の制度がある埼玉、千葉など都外の受験生が対象です。

中堅校などは、単願、併願推薦ともに「内申基準イコール合格基準」という学校が大半で、その場合は12月の「入試相談」（各中学校の先生と私立側の話し合い）の時点でほぼ合格とされます。秋以降の「個別相談会」で推薦や併願優遇（一般）の可否を打診できる高校も少なくありません。

その一方、難関・上位校などの推薦では、内申基準は出願条件であり、本番の学科試験、面接などで合否が争われ、高倍率（倍率2～4倍台）の「激戦校」もみられます。

最後に、2018年度入試の主な変更点などを挙げておきましょう。共学化を行うのは、**文化学園大杉並**（女子校）です。また**千代田女子学園**は、校名を「**武蔵野大学附属千代田高等学院**」に変更し、

新たに共学部を設けます。**中村、和洋九段女子**は高校募集を再開。一方、**日本橋女子館**（「開智日本橋学園」に校名変更、共学化）、**三田国際学園**では帰国生以外の高校募集を停止する予定です。

江戸川女子は一般入試の2回（2月16日）を新設。**巣鴨**では入学手続き金の延納制度（公立の合格発表後まで）を導入し、受験しやすくなります。

コースなどの変更では、**豊島学院**が最上位のスーパー特進類型を新設。**工学院大附**はハイブリッドサイエンスコースなど4コース制に改編。**岩倉**ではL特コース（指定の部活動を行いながら大学の現役合格をめざす）を導入します。

神奈川県

入試地図は「内申重視」の傾向 併願可の書類選考も増える

神奈川県の私立高校では、推薦入試は1月22日以降、一般入試は2月10日以降に実施されます。

まず、推薦入試について述べましょう。2017年度に神奈川の私立53校のうち、推薦を行ったのは48校でした。

県内私立の推薦は単願（第1志望）のみで、1月の本番では面接、作文などが課されます。ただ、各高校が定めた内申点の推薦基準などを満たせば、12月の「入試相談」（各中学校の先生と私立側の話し合い）で合格が内定し、本番は無競争（全員合格）という高校が大多数になっています。2017年度も推薦で不合格が出たのは**慶應義塾**（倍率は2.5倍）、**白鷗女子**（同1.1倍・全コースの合計）などに限られました。なお、**日本女子大附**の推薦は「入試相談型」ではないのですが、受験者の減少により全員合格となりました。

では、一般入試に移りましょう。県内私立では一般も「内申重視」の色合いが強くなっています。

大半の県内校（40校以上）が一般入試に「併願受験」制度を設けており、これは各校の内申基準などを満たせば12月の「入試相談」でほぼ合格とされます。この併願受験は、本命の他校に不合格となったらその高校に入学することが条件です。

それよりも内申基準が低い「単願受験」を併用する高校もあります。2017年度に併願、単願受験を利用したのは約3万8000人にのぼりました。

もう一つ、県内の押さえ校（すべり止め）を確保できる制度として、最近「書類選考」も広がっていることが注目点です。

書類選考とは、一般入試に区分されますが、各

校の内申基準を満たして「入試相談」を経れば、試験を受けることもなく合格が決まります。法政大女子、法政大第二の場合は第1志望者のみが対象ですが、それ以外の実施校では「併願可」です。

2017年度に併願可の書類選考を実施したのは、以下の22校。〔男子校〕鎌倉学園、藤嶺学園藤沢、藤沢翔凌、武相、横浜。〔女子校〕北鎌倉女子学園、相模女子大、聖ヨゼフ学園、聖学院、緑ヶ丘女子。〔共学校〕麻布大附、アレセア湘南、関東学院、関東学院六浦、湘南学院、湘南工科大附、中央大附横浜、鶴見大附、桐蔭学園、横須賀学院、横浜商科大、横浜創学館。書類選考の受験者は合計で約6800人となりました（前年は約5400人）。

近年は「書類選考が受験のメイン」という状況の学校や、一般を書類選考のみで募集する学校なども出てきています。

一方、併願受験や併願可の書類選考を行っていないのは、慶應義塾、日本女子大附、法政大女子、桐光学園、法政大第二など一部の上位校です。

上位校の一般入試の状況はどうでしょうか。2017年度に倍率が高かったのは、中央大附横浜のオープン（4.4倍）、法政大第二の「学科試験」男子枠（4.1倍）・同女子枠（4.0倍）、山手学院のオープンB日程（3.7倍）・同A日程（3.1倍）、日本大の一般B日程（2.4倍）、慶應義塾（2.2倍）、法政大女子の一般B（2.1倍）などです。

慶應義塾では1次の試験日変更（2月12日→同10日）により東京の難関校と競合して、受験者が大幅に減少（569人減）、倍率は2016年度の3.3倍から相当なダウンとなりました。

さて、2月の一般には「オープン入試」という制度もあります。内申を使わずに本番のテストで合否を決める枠が、併願受験などの実施校ではオープン入試と総称されます。2017年度は、この実施校は27校でした。「内申点よりも入試学力で『上』を狙いたい」という生徒はオープン入試でチャレンジ受験してみるのもよいでしょう。

2018年度入試の変更点で、最大のトピックは法



政大女子が共学化を行うことです。それにともない校名を「法政大学国際」に変更します。また、桐蔭学園は男子部、女子部を統合し共学に変わり、同時にプロGRESS、アドバンス、スタンダードの3コース制に改編します。

山手学院では推薦（定員20人）を廃止し、その分、一般のオープン入試の定員を増やします（オープンA日程25人→40人、同B日程25人→30人）。一方、捜真女学校は高校募集を再開し、推薦で若干、一般（書類選考）で10人を募集します。

埼玉県

人気の「1月併願」がメイン 個別相談会に必ず参加して

埼玉県の私立高校では入試開始日は1月22日です。例年、この「初日」から1月25日ごろに県内私立の大多数が併願入試（併願推薦）を複数回、実施しており、この1月の併願入試が受験のメインという入試地図が定着しています。

1月の併願入試は、3月の県公立入試まで他校と併願が自由であり、しかも事前の「個別相談会」で合格がほぼ判明するという大きなメリットがあります。このため、「受験しやすい」と人気が高く、2017年度も県内私立の総応募者のうち、1月併願入試が約74%と大半を占め、かたや単願入試（単願推薦）は約18%、一般入試は約8%でした。

この1月併願で押さえ校（すべり止め）を確保したうえで、公立やさらにレベルが高い私立にチャレンジという受験パターンが埼玉では「定番」になっているのです。

県内私立47校のうち、1月併願の制度がないのは、難関校（慶應義塾志木、早稲田大本庄高等学院、立教新座）や、音楽系高校（東邦音楽大附東邦大第二、武蔵野音楽大附）など少数です。

1月併願、または単願入試を受験するときは、「個別相談会」に必ず出席しましょう。各私立で夏ごろ～秋以降に複数回、開催しています。この場で、模試の結果や内申点（1、2学期の通知表のコピー）などを提示すると、私立側が併願、単願入試の可否の見通しを話してくれます。最近は、合格の基準に少し足りなくても「OK」とする高校も増えているようです。

2017年度に、併願、単願入試など全体の受験者がかかり増加したのは、叡明（871人増）、星野（542人増）、栄北（184人増）、武蔵越生（150人増）、栄東（130人増）、細田学園（129人増）など（3

月試験〈2次募集〉を除く）。

一方、難関校では「個別相談型」ではない推薦入試（第1志望）、一般入試を実施しています。2017年度の一般の状況をみておきましょう。慶應義塾志木は受験者の減少（62人減）で倍率3.9倍→3.7倍とやや低下。早稲田大本庄高等学院の男子枠は定員の5人削減（105人→100人）により倍率3.1倍→3.2倍と若干上がり、女子枠は受験者が急減（101人減）し倍率4.8倍→3.7倍に緩和しました。立教新座では受験者が急増（207人増）したものの、合格者の増員で倍率は1.9倍→2.0倍とわずかな上昇でした。

2018年度には、浦和麗明（女子校）が共学化を行い、コース制も改編（特選Ⅰ・Ⅱ類、特進Ⅰ・Ⅱ類、進学、保育進学）。また新校舎が2018年春に完成予定で、人気上がりそうです。淑徳与野はS類にマルチスタディコースを新設。大学入試改革への対応として同コースでは情報発信力や思考力などを育成します。入試に関しては、早稲田大学本庄高等学院が推薦（α選抜）で内申の出願条件を3年間の9科合計115のほかに「中2で9科38・中3で9科40」のいずれかに変更します。

千葉県

前期の定員比率が94%に！ 「前期勝負」の受験状況続く

千葉県の私立高校入試は「前期・後期選抜」の枠組みになっています。試験は前期が1月17日以降、後期は2月5日以降に実施されます。

ただ、大多数の高校で前期に定員が偏っており、後期の枠は狭いことが注意点です。2017年度は県内私立全体の定員で、前期の比率が約94%にのぼり、後期は約6%にとどまりました。

後期の枠を廃止して「前期の定員が100%」の高校も増えています。2017年度に千葉私立53校のうち、後期を実施しなかったのは以下の16校です。千葉晴陽、市原中央、木更津総合、志学館、芝浦工業大柏、渋谷教育学園幕張、翔凜、拓殖大紅陵、千葉英和、千葉敬愛、千葉明德、東葉、日本体育大柏、日出学園、茂原北陵、麗澤。また、後期の募集を若干名としたところが8校ありました（植草学園大附、敬愛学園、秀明八千代、千葉県安房西、中央学院、東海大付浦安、八千代松陰、流通経済大付柏）。2018年度には国府台女子学院、成田、八千代松陰などで後期の枠が廃止されます。

私立側と歩調を合わせ、受験生も前期へシフト

しています。2017年度に県内私立の総応募者のうち、前期が占める割合は約95%となりました。

このように県内私立入試は「前期勝負」の傾向がとて強まっており、「前期で合格を勝ち取る」ことが受験作戦のカギになります。

とはいえ、もし前期で不合格になった場合は、その私立への思い入れが強ければ、悔いが残らぬように後期で再受験するのがよいでしょう。

さて、中堅や入りやすいレベルの高校では、前期の推薦（単願、併願）、とくに併願推薦（第2志望以下）が受験の中心です。この併願推薦で押さえ校（すべり止め）を確保して、公立や上位レベルの私立を狙う受験パターンも定着しています。

単願推薦（第1志望）、併願推薦は中堅校などでは、各校の内申点の基準などを満たせば、12月の「入試相談」（各中学校の先生と私立側の話し合い）でほぼ合格とされるところが大半になっています。

また、前期で推薦に加え、一般の枠を設ける学校もかなり増えています。推薦の内申基準に届かないときは、その学校を前期の一般で受けてみるというのも一策です。

一方、上位レベルの高校では「テスト勝負」の一般のみを実施するところが主流です。

おもな難関・上位校の2017年度の状況をみてみましょう。県内最上位の渋谷教育学園幕張では、前期「学力枠」は受験者減少（81人減）と合格者の増員によって、前年の倍率3.5倍から2.3倍に緩和しました。市川では前期（一般）は前年並みの入試状況で倍率は横ばいの2.3倍、後期は受験者減（71人減）と合格者の大幅増（49人→105人）が重なり倍率7.5倍→2.8倍に急落しています。

昭和学院秀英では、前期は受験者増（116人増）を上回る合格者増員により倍率2.6倍→2.2倍とやや低下。後期は受験者減（53人減）などで倍率4.2倍→3.0倍に下がりました。

なお、茨城県では、県内トップ校の江戸川学園取手は一般を2回実施（1月15日、20日）。医科コースの倍率は1回2.7倍、2回2.9倍に。普通科コースでは、医科コースからのスライド合格を含めると1回1.3倍、2回1.4倍でした。

では、2018年度の変更点にふれておきましょう。成田では後期（定員20人）の廃止にともない、前期で「一般」の定員を100人→120人に増やします。東京学館浦安はコース制を改編し、最上位の特進コース選抜クラスを導入。また、東葉も最上位の特進クラスを新設します。